

糸魚川市駅北まちづくり会議（推進会議） 記録

| | | | |
|--|--|----|----------|
| 日時 | 令和2年10月28日（水）13:30～15:00 | 会場 | 駅北広場キターレ |
| 件名 | 1 開 会 2 あいさつ 3 議 題 (1) 駅北まちづくり戦略について (2) 意見交換 4 閉 会 | | |
| 出席者 | 米田徹 糸魚川市長 糸魚川商工会議所 猪又史博 会頭 糸魚川広域商店街 小坂功 会長 一般社団法人糸魚川市観光協会 佐々木繁雄 事務局長 ひすい農業協同組合 吉原勝廣 組合長 むながわ森林組合 岩崎秀治 代表理事組合長 糸魚川信用組合 黒石 孝 理事長 大町区 齋藤伸一 区長 新潟県糸魚川地域振興局 八木威 局長 推進会議座長 清水 義次 （外部アドバイザー） 実践会議座長 西村 浩 （外部アドバイザー） | | |
| 【会議概要】 1 開 会 2 あいさつ （米田市長） ・市民ひとりひとりが「できることから始める」を実践することで、「民間主導、行政併走」のまちづくりへと転換していくことが重要と考えており、市民が主人公となって、まちを育てていく活動に対して、より活動しやすい環境は行政が整えていくという「公民連携」の取組を進めていく。 ・それらの活動がさらに促進されるためには、関係団体等がまちづくりに関わって、活動を応援してもらいたい。 ・戦略の実践活動と施設の連携により、新たな人の動き等が生まれ、まちに良い変化をもたらしてくれるものと期待している。 （清水座長） ・周辺を散歩させてもらい、まちが変わってきていると感じた。復興がスピーディーに進んだことが何よりも良かった。 ・いよいよこのまちが、大火以前よりもより良く育っていく過程を作りだそうとしており、委員の皆さんの熱心な議論を期待したい。 | | | |

3 議 題

(1) 駅北まちづくり戦略について

=資料1= 事務局説明

(清水座長) 実践会議の座長の立場で補足があればどうぞ。

(西村実践会議座長) 2年間検討してきたが、検討の大前提として日本という国が人口減少、コロナ禍、自然災害の3つの未体験ゾーンに突入しているということ。災害が起こる街でどのように暮らすかを、これからは考えないといけない。

検討に際しては、これらの現状を理解しながらの発想が必要で、それに対する学びが必要となる。このことから参考4ページ以降に記載のある4人の講師を迎え、レクチャーを聞きながら各々の分野の学びを進めてきた。そして、その学びが終わった段階で自ら糸魚川のまちで何ができるかを実践会議、部会において議論してきた。

実践会議のメンバーの多くの人が言っていたことは、参加してよかったと。何よりもこれまでに接点がない人との接点できたこと。そして、連携した活動が既に始まってきていることも実践会議の成果と考えている。

一旦は戦略としてまとめているが、今後はまちなかにいる自分を探せるイラストが更新されていく。例えば、イラストを用いて子どもたちにやりたいことを書かせるワークショップを開催し、それを実践していくことで、イラスト内の活動や人を加えていくことができる。毎年、このイラストが進化していくことが一番のポイントとなる。

実践会議のメンバーからでた「家族」という言葉。他人なら気にならないが、家族だと気になる。家族だから許せたり、心配したりと、人の関係やまちでの活動の在り方が変わってくるのではないかと考えている。

糸魚川を目指すべき一定の方向を示せた。推進会議の委員には、戦略を進化させていくことを念頭に議論いただければと思う。

(2) 意見交換

(清水座長) 戦略案を見て、小中学生にも読んでもらいたいなと感じた。よくある構想的な戦略でなく、実践付きの戦略であることがよいと感じた。委員からご意見ありましたらどうぞ。

(委員) 戦略案について率直にわかりやすい、やさしい感じを受けた。地域資源を見直しながら、子育て・地産地消・高齢者元気に視点を絞りながら、1つ1つの活動を大切にしていくことが良いと感じた。

(委員) これからの戦略というふうに見させてもらった。大火発災から創業支援を続け、地域の経済活動推進のために市と連携して活動してきた。令和3年度からは経営発達支援計画を更新するなど、今後、市との連携がますます重要となってくる。このような背景からも、市の経済を担当する部署等と一緒に場所で、まちなかにおいて地域の経済活動の取組を進められたら良いのではないかと考えている。もう1点は、糸魚川の玄関口として、文化的・シンボリックなものや場などを

望む声も聞こえており、その対応ができないかと考えている。

(委員) 商店街の立場と個人で率直に感じたことを述べたい。戦略を初見して温かみのある戦略と見た。一方で、駅北地区は糸魚川の顔として、観光などの考えがあっても良かったのではないかと考えている。現実的な実戦活動を優先し、にぎわいの拠点施設は子育て支援を中心とした施設整備となっているが、これで戦略と呼べるのかと疑問が残る。駅北は商店街として商売を続けていける場所になるような考えが欲しい。もともと、商店街は賑わっていたが、郊外大型店舗の進出や車社会によって、商売が成り立ちにくくなってきている。商店街の衰退は、商店に原因があるように言われることもあり、一部でそのようなことも否定できないが、逆境のなかで、これまで商店街として頑張ってきたことも皆さんから認識してもらいたい。コロナ禍でテレワーク、ワーケーションなども注目されており、糸魚川の空き店舗などを利用して、官民一体となって盛り上げていくことが必要と考えているので、お力添えいただきたい。

(委員) 戦略は率直に想像していたものとは違ったが、私が古いという感じなのかも思う。実践会議のメンバーが作ったものは尊重したいし、実践していくべきだ。いろいろな小さいことを作っていくことは、まちづくりの基本的な活力を生み出す原動力となる。そこから次のものが生まれてくるので、実現のために、私たちが応援していくべき。質問として、実践活動は誰が進めていくのかというところをお聞きしたい。もう一つ、サテライトオフィスなどの都会からの移住やワーケーションなどの個性ある受け皿を作っていくことが必要と感じている。

(清水座長) 実践活動を具体的にどのように進めていくかという点について、実践会議の座長としてはどのように捉えているか。

(西村実践会議座長) 実践者はまちづくりの一番の課題。「欲しい」ということは皆さん言うが、誰も実践しないので実現しない。誰がやるのかというのを突き詰めてきたのが実践会議で、メンバー全員が実践者である。戦略は更新していく前提で作成しているので、観光などのキーワードを加えて進化させていけば良い。リノベーションスクールなどで人材を発掘してきて、ようやくチームを作って、お金を稼ぎながら小さくやる事業を考えてきたという状況。例えば、サテライトやワーケーションオフィスなどは、誰がどのようにビジネスモデルとしてやるのかを問いかけて、それに対して手を挙げる当事者がいるかを探していくのが次の段階となる。ワーケーションなどは、ワーケーションしたいまちとして選ばれるかどうかは鍵。選ばれるためには、地域の人達が生き生きと、当事者として楽しそうに活動していて「いいまちだな」と思ってもらわないと始まらないし、これからが本番と考えている。

(清水座長) 西村座長の意見に賛成です。付け加えるとすると、資料の参4ページにある秋田県五城目町の取組が参考になる。丑田さんという若者が、交通不便な五城目町の空き物件に入りシェアオフィスを成功させている。五城目町に何の縁もない丑田さんが事業を始めたきっかけは、五城目町でほぼ毎日やっている朝市。

500年続くお年寄り主体だった朝市のなかに若者が加わってやっている姿を見て、このまちなら自分の未来を作れると思って丑田さんが町に関わっていったという経過が大事。日常が楽しそうだなという場所になったら、糸魚川の交通立地なら外から人が来る可能性は高い。日常の暮らし方が素敵なまちは、未来ある企業が選んでいく形になると思うし、ヒントになったら良いと思う。

(委員) 海の資源は素晴らしいものが多く、朝市などもローテーションなどが考えられると思う。市内には流木も多く、スタンドに加工して情報発信したところ反響があった。海ではヒスイだけでなく、ガラス石なるものもある。海の専門家でないが、そんな地域資源を生かしていくことを考えたい。

(西村実践会議座長) 市民の皆さんが実践者になるということがまちの魅力の1つだ。

(委員) 戦略というと行政が作成する難しいものが多いが、わかりやすいものになったのではないかな。戦略まちづくりの主役は市民であり、その主役たる市民の活動の具体的なスタートを示している。活動のなかには、自分たちが既に応援しているものもある。糸魚川の中心地である駅北地区が、子どもから大人までが集う場所になるという意味で「まちなか大家族」があって、そこには子育てがあったり、豊かな暮らしの情景がある。そして、できれば仕事もあってほしいし、スタートの活動がビジネスの世界にも広がればと期待したい。新幹線の駅からも近く、駅北地区には活用できる資源が多くあるので、戦略というスタートラインに立った今、この後は、まちをフル活用していく活動を進めてほしい。これからも、行政機関としてできうることを支援していきたい。

(委員) 糸魚川区長会で酒田大火の視察に行った際に、酒田市長が言っていたことは、国の指導をもって1週間で復興計画を策定したことは失敗だったということ。計画策定後の郊外大型店舗の出店や車社会の到来などの社会情勢の変化を読み切れなかったという。

質問として、1つ目は、戦略は、時代が変わってきた場合に変更が可能かどうかを確認したい。2つ目は、駅北は51.6%と高齢化率の高い地区。戦略で大いに人呼ぶことは良いが、高齢者には健康だけでなく、安らぎや生きがいが必要でないか。例えば、お風呂などの安らげる場所などを作ることなど考えられ、駅北にお年寄りを呼べる取組が良い。

(清水座長) 時代の変更等にどのように対応していくか。事務局どうか。

(事務局) 西村座長の話と同じになるが、固定された計画でなく成長計画。冊子になるかならないかは別として中身は進化(変更)していく。その時代にあった戦略として取り組むことが必要と考えている。

(委員) コロナ禍のなかで、自分達が忘れかけていたものをベースにしながら戦略を作成したと感じている。これを発展的にもっていくには、どう実行していくかというアクションプランと効果検証が必要になってくる。それぞれの取組の方向性のなかでは、自分たちは地産地消に関係することが多い。コロナウイルス等でワクチンがないといわれる今、生きるうえでの最大のワクチンは食事ともいわれて

いる。食と農とをつなぐなかで、まちづくりを進める観点が必要。できる限りの応援をしていきたい。活動が長続きするとなると実践者のボランティアだけでは難しいところがあるし、ビジネスとどのように結び付けていけるかを交流しながらにじみ出せていけば活力もでてくる。行政と民間との役割をはっきりと明記しておきながら、さらに新しい連携を進めていくことが必要になると感じている。

(米田市長) 実践会議の委員の意見をよく戦略にまとめてもらった。コロナ禍中に戦略が検討されてきたことで状況を踏まえた新たな戦略になっている。コロナ禍で社会がグローバルからローカルに変化してくるのではないかと考えたときに、糸魚川は、大都市とは違って市内で経済などを完結できるのではないかと感じた。物事の見方を180度変える状況で、これまでどおり自分達が欲しいと思ったものを要望するのではなく、自分達の目的を作っていくことが大切。言えば何でも整ってくる時代ではなく、欲したときにすぐに全員が話して支えあっている環境で、実践会議のメンバーはリードしてもらえると感じている。要望でなく、皆が欲しいものを皆で作っていくという仕組みが、魅力あるまちづくりに繋がり、外部の人が「まちのわいわいガヤガヤが気になる」となる。今までの市内イベントでも多くの市民が集まってくるし、その中には多くの若い人がいると気づく。集まるときには集まり、何かあれば皆で乗り越えていくということが必要と考えている。

(清水座長) 委員の皆さんからご意見をいただきましたが、戦略について委員の皆さんからお認めいただくということでしょうか。

(委員全員) 良い

(清水座長) 全員一致で合格ということですね。ありがとうございました。

(清水座長) 先ほどから委員の皆さんから良い意見をたくさんいただきました。1つ1つの積み重ねで、「何かいいまちだね」という魅力が作られていく。ここのキターレのシェアキッチンで早くも巣立ち始めていると聞いている。ここから新しい起業家が生まれていることが大事。他と比較することはよくないが、津波の被災地の多くでは土木事業と区画整備事業は急速に進んでいるが、一番大切な仕事の回復が遅々たる動きで、復興といえないのではないかと感じている。糸魚川の本当の大火からの復興はとりかかったところで、本日、委員から認めていただき応援、支援の言葉もいただいた。委員の皆さんからも大いに資金面でも支援してもらいたいが、結局のところ事業を生み出すのは「人」だ。東京の話してお祭りの仕組みを人材発掘に重ね合わせてはどうかという人がいて、コミュニティが続く仕組みが祭りにあるとも言われている。神田祭では、人を見分けることを長くやっていて、優秀な人材とは、神輿の花を飾る人間でなく、準備や片付けを一通りできる人間といわれていて、そのような人材をまちづくりに引き上げることが必要。そのような実態として作り出せれば、外部者が目を付けられないはずがない。農地、山、海と繋がる舞台が駅北であり、周囲のいろいろな資源と結びつくことが大切である。

(西村実践会議座長) 駅北大火直後からお付き合いを始めさせてもらった。東日本大震災の復興のやり方に違和感もあったが、糸魚川では新しい復興の在り方を続けてきた。

結果的に東日本大震災では人が戻ってこない状況が起こっている。人口減少で人が戻ってこないこともある。私たちが糸魚川モデルによって復興できるという状況をどのように作るかということが大事。この駅北広場キターレの場所も当初は大屋根を望む意見だったが、屋根だけだと冬季は寒くて使わないので、防災広場の当初目的を変更して整備した。防災広場だと防災に特化するため、今のように高校生がいて、市（いち）がある状況にならなかった。復興はやり方が一定で決まっているが、糸魚川は柔軟な対応をしてくれた。

変わるという話をしたが、最初に毎年変わる戦略にしてくれと頼んだ。未体験ゾーン時代なので、戦略は当事者がやりたいということを盛り込み、社会の状況をみて、軌道修正しながらの実践活動となり、変わり続けなければ時代にフィットしないということが容易に想像できる。

お風呂の話がでたが、公共の福祉として成り立っていた公衆浴場は、今となってはビジネス的に成立させることが難しい状況。しかし、公共でなく民間であれば、やりようがある。首都圏等では、銭湯に高齢者がいて、そこに親子で行くとお風呂のなかで面倒を見てくれる人がいてお母さんが助かることがあり、そこで協力できる子育て支援がある。行政が子育て支援を中心とした機能の施設整備を宣言しているわけだから、それに合わせて民間ビジネスとしてできそうな気がしてくる。子育て支援以外でもキターレも最初の一步であって、高校生が集まったりとか、これからの可能性が生まれてきている。民間が知恵を絞ってチャンスを生かして、見たことのない未来に合わせたビジネスを構築し、挑戦し、稼ぐことが大事。

戦略を進化させていくヒントをたくさんもらったので、引き続き応援のほどお願いしたい。

(清水座長) これからが本当の出発点。事業をつくり出しながら、まちづくりを進めていくこと。3,300人のまちの紫波町オガールプロジェクトを参考にしてもらいたい。人口が減り止まり、まさかの待機児童が62人発生している。旧庁舎の跡地は、民間事業でお風呂を中心にりんごの発泡酒であるシードルを作る施設となる予定である。若い家族が増え、高齢者の声を聞くと「こんな幸せなことはない」「こんな風景を夢にも思わなかった」と言っていた。糸魚川の全天候型広場と網の目のように張り巡らされた公園、歩いてやさしく楽しいまちができた。コロナ禍における基盤整備がほぼ整ったので、偶然的なせる技と皆さんの努力、あとは、この価値を認めて良質な民間の投資がどのようにかぶさってくるかが糸魚川の本当の復興となる。これからの糸魚川の発展を祈願しています。ありがとうございました。

4 閉 会